第二十二回ふくふく童話大賞　「　奨励賞　」

「耳のヒーロー」

「うわわわあぁん！」

ここは、小学校の中庭です。運動場のほうから、大泣きしながら体育着のウシヤが走ってきます。そのすぐ後ろからネコタ先生が、ポニーテールを揺らしながら追いかけています。ネコタ先生は、若い女の先生です。

ウシヤは、池の前までくると目を閉じて両耳をふさいでうずくまりました。先生は、心配そうに少し離れた木陰からじっと様子を見ています。

少し前に、運動場で大騒ぎがありました。体育の授業でドッジボールをしていたのですが、ウシヤにボールがわたったのに、もっさりとした動きでなかなかボールを投げません。投げることができなかったのです。

「こっち、こっち！」「右、右！」「もー、はやく投げろよ！」

敵も味方も、あっちこっちから同時に大声で叫ぶので、ウシヤはまるで耳を強く叩か

れたように痛いのでした。しかも緊張して頭がこんがらがってしまいました。ルールだっていつもならわかるのに、痛くて苦しいのでなにがなんだか分からなくなるのです。早く、と言われるとますますどうしていいか分からなくなります。ボールを持ったまま、きょろきょろ周りを見ていたら、両手を大きく広げた男の子が目の前に現れて、ひときわ大声で言いました。

「こっち、早く！」

ウシヤは、ぽんとボールをパスしました。男の子は、ボールを持つとダーッと駆けていき、味方の女の子にボールを当てました。ウシヤがパスしたのは、敵チームだったのです。

「なぁにやってるんだぁ！」

味方チームリーダーのトラオが、吠えるようにどなりました。すごく恐い顔でにらんでいました。味方チームは、みんな文句を言っています。ウシヤは、もう痛くて苦しくて恐ろしくて、たまらなくなって大声で泣きながら運動場から逃げ出しました。そし

て今は、池の前にいるというわけです。

ウシヤは、この中庭の池の前がお気に入りです。池の周りには木がたくさん植えてあって、小鳥や蝉がやってくるし、池には色とりどりの魚が泳いでいます。あまり人がやってこないので静かです。耳をすますと風でゆれる木の葉の音、魚がはねる水の音が聴こえます。だんだん気持ちが落ち着いて、涙が止まりました。まるで日向ぼっこをしているように心がぽかぽかしてきたのです。そのようすを見ていたネコタ先生が近づいてきました。

「ウシヤ君、だいじょうぶかな？」

ウシヤは何も答えません。なんと言っていいのかわからないのです。だから黙っていました。ウシヤは、よく「キレやすい子」と呼ばれていました。そのことは、自分でも知っています。でも、わざと意地悪でそんなことをしているのではありません。実は、とても困っていたのです。困っていることがうまく言えなくて、ますます困っているのでした。

（なんで、いつもこうなるんだろう？）

「じゃあ、気分が良くなったら、おいでね」

先生は、優しくそう言うと運動場に戻っていきました。

「どうせ、ぼくなんか」

すらりとしたネコタ先生の後ろ姿を見送りながら、ウシヤはつぶやきました。自分は、ドッジボールだけでなく、グループでの遊びやゲームがとても苦手だし、本を読んだり字を書いたりするのもうまくできないし、なにをやってもダメな子だと思っていました。

キンコンカーンコーン。

授業の終わるベルが鳴りました。もうすぐ、クラスのみんなが駆けてきます。みんなに顔を合わせるとばつが悪いので、のろのろと立ち上がりました。ゆっくり歩きだしましたが、向かったのは教室でなくて保健室でした。ウシヤは、ほとんど毎日というくらい保健室にいました。

保健室につくと、すぐにベッドに入って頭からシーツをかぶりました。保健室の先生

が、なにか声をかけてくれました、ウシヤの耳にはまったく何も入りません。そのうち、ぐっすり眠ってしまいました。ぐったり疲れきっていたのです。

ウシヤは、しばらくして目が覚めるとベッドから起き上がりました。ボーッとした頭で壁にかかっている時計を見ると、給食時間が過ぎていました。お腹がグーッと鳴りました。胸がむかむかして、気分が良くありません。

ウシヤは、体育着のまま家に帰ろうとしましたが、ランドセルを取ってこようと思い直して教室に向かいました。午後の授業は、音楽だから席からランドセルをそっと取って帰ればいいと考えたのです。

ところが教室に入ると学活でした。ウシヤは、よく忘れ物をしますが、時間割もよくまちがえるのです。そのまま保健室に戻ろうかと迷っているうちに女の子の一人がこちらを見て目が合ったので、しかたなく教室に入りました。すると、何か話し合いをしていたクラスのみんなとネコタ先生がいっせいにこちらのほうを見たので、すっかりおどおどしてしまいました。ネコタ先生は、ウシヤが教室に戻ってきたので、とて

も嬉しそうです。

「ウシヤ君、気分はよくなった？　さぁ、席についてね。今、いなくなってしまったマリリンのことを話し合っていたんですよ」

マリリンというのは、教室で飼っているハムスターのこと。昨日、カゴの掃除をしているときに逃げだしてしまったのです。

「先生、きょうの朝、後ろの棚のところにマリリンがいました。がんばって捜したけど、見つかりませんでした」

ウシヤの前の席にすわっているトラオが、元気よく発言しました。みんなやっぱりという顔でうなずいています。

「マリリンは小さいから遠くに逃げるとは考えにくいよね。さぁ、みんなどうしたらいいと思う？　ハムスターは、とても敏感だから、おおぜいで捜すとますます隠れてしまうよ」

みんなは、すっかり考えこんでしまいました。ウシヤは、早く終わって帰りたかっ

たのですが、ネコタ先生がこちらを見てやたらニコニコしているのを不思議に思っていました。先生は、いいアイディアがあるようです。

「じゃあ、クラスを代表して、すごく耳のいいウシヤ君に捜してもらいましょう」

みんな意外そうな顔をして、こちらを見ました。ウシヤは、いきなりだったのでどぎまぎして下をうつむきました。

（どうせ、ムリ。どうせまた、できなくてみんな、おこるんだから）

じっと知らないふりをしていれば先生もあきらめるかもしれないと思いました。耳がいいなんて言われたのは初めてのことだったので、少し気にはなりましたけど。でも、先生は、すぐ近くにきて熱心に頼みました。

「ね、お願い、ウシヤ君。マリリンを助けて」

ウシヤは、本当に困ってしまいました。自分のエネルギータンクはもうからからで、底のほうにわずかスプーンひとさじくらいしか残っていない感じでした。このエネルギーを使い果したら、倒れてしまうかとさえ思いましたが、なんとか力をふりしぼって後

ろの棚のほうに歩いていきました。
「みんな静かに、シーッ」
ネコタ先生が、後ろでみんなに言っています。教室の中は、誰もいないみたいにシーンと静まり返っています。
ウシヤは、目を閉じて聞き耳を立てました。池の前でよくそうするように、全身を耳にしている感じです。しばらくすると、カサッと小さな音がしました。棚の奥にわずかなすき間があって、そこから聴こえてきます。耳を近づけると、今度ははっきりと、小さな生き物が動く音がしました。すき間からのぞくと奥の方に動くものが見えました。
「先生、いました」
「おおっ」
みんなはすごく驚きました。こんなにすぐ見つけるなんて誰も考えていなかったのです。先生はニコニコして「すごいね、さすがだね」と、うんと褒めてくれました。ウシヤは、マリリンを見つけましたが、つかまえることはできません。生き物は大好きだ

けど、さわるのは苦手なのです。ネコタ先生はそれを知っているので、トラオに言いました。

「さぁ、動きがすばやいトラオ君の出番よ」

トラオは返事の代わりに立ち上がると、ハムスターのエサを取りました。これでマリリンをおびき出すのでしょう。でも、うまくみえないようでウシヤを手招きしました。

「どこ？」

「もっと右。そう、その奥」

ウシヤが指さすほうに、トラオがけんめいにエサを差しだします。そのうち、マリリンがすき間のほうに顔を出しました。トラオは、そっと包み込むようにマリリンを抱き上げると、みんなに見せました。

「ワーッ！」

みんなはいっせいに歓びの声をあげました。

「トラオ君もウシヤ君も、偉いね。おたがいに得意なところをいかして、やりとげたこ

とが一番すばらしいと思います。みんな拍手！」

教室いっぱいに拍手があふれました。トラオは、ウシオの手を取ると、思いっきり両手をあげてポーズを決め、拍手に応えました。ウシオは初めてヒーローになって、どぎまぎしましたがいい気分でした。身体がすっかり軽くなって、さっきまでからからだったエネルギーが、ずいぶん増えた感じでした。

トラオが、ウシヤに笑顔を向けました。

「ドッジボールの練習、一緒にやろうな」

トラオに、こんなに優しい言い方をされたのは初めてです。ウシヤは、笑ってうなずきました。

（オカ・ラクマ）